

## 原点から問い直す生活科の未来（2）

－ 誕生期の活動で学んだこと －

The future of the Living Environment Studies  
upon which it reflects from the starting point (2)

－ It learned by activity of the birth term －

馬 居 政 幸

Masayuki UMAI

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

### はじめに

生活科は1989年3月告示の小学校学習指導要領において誕生した。その準備段階での論議の考察を、「原点から問い直す生活科の未来（1）」として、今年度本研究報告（人文・社会科学・自然科学篇）にまとめた。本稿では、告示後の生活科実践に参加し、学び、リアルタイムで各種教育雑誌に寄稿した拙稿を辿ることから生活科の未来の課題を浮き彫りにしたい。

### 第1章 全面実施前夜では

学習指導要領が告示されたあと、全国の研究校で生活科の授業が公開され、かつてない数の教師が参観した。そして戸惑った。元気だが意味を読み取れない子どもたちの多種多様な動き、次々と子どもに声をかけるが教えることを放棄したかに見える教師の姿に。生活科実践への歩みは「授業の見方」を変えることから始まった。学習指導要領告示から2年目の1991年秋、「生活科の授業を見る『ものさし』」との『生活科授業研究』編集部の求めに応じて寄稿したのが本章の「第1節 生活科にふさわしい『授業の見方』とは」である。さらに全ての小学校で生活科を実施しなければならない新学期が近づくにしながら、管理職の立場の教師から、生活科の説明の仕方を求められるようになった。授業者なら生活科授業実践に参加してもらえばいい。だが、「説明の仕方」となれば“新たな言葉”が必要になる。管理職が主たる読者の『学校運営研究』編集部の依頼により、生活科全面実施直前の1992年2月号に寄稿したのが「第2節 生活科実践の基本用語」である。

ここにあげた教育誌はともに明治図書の樋口雅子氏が編集長である。本報告の目的は、生活科誕生期90年代の拙稿の再考察の作業を、今と未来を生きる子どもたちへの教育課題を問い直す試みに重ねることだが、それは樋口氏を代表に教育ジャーナリズムが果たした役割の再評価につながるであろう。

## 第1節 生活科にふさわしい「授業の見方」とは<sup>1)</sup>

### －「言葉＝文字」から「場面＝絵」へ－

#### 1) 4色では間に合わない

私は生活科に出会うまでは授業を見せていただく際に4色ボールペンを用意した。教師と子どもの言葉と私の感想、それぞれ異なる色で記録するためである。4色目は予備。教師や子どもの言葉で特に注目すべき部分にラインを引き、思いついたことを記録するために使用した。

他方、教材の記録は極めて稀。学習指導案を読めばわかるからである。まして教室の広さ、机の配置、出入り口の位置、廊下から下駄箱までの階段、中庭の花壇の様子などを気にすることはなかった。それらは1回の授業では変化しない要素であり、授業の流れを左右する要因でもないからである。変化するのは教師と子どものみ。それもあくまで教師が主で子どもは従。そのため授業を見る視点（関心）を教師の言葉→子どもの反応→その反応に応じる教師の言葉へと移し、この繰り返して45分間を教師がいかに使うかに注目した。教師の言葉と身体の動きが子どもの言葉と動き（追求）をいかにコントロールする（深める）かが、良い授業の判断基準と考えた。子どもはあくまで教える対象。問題は教師の教え方。教師による実際の授業展開と指導案の比較が検討課題であった。

また、教師は机間巡視等で体全体を移動させるが、子どもは椅子に座ったまま、動かすのは首から上と手首より先、教師の姿は教室の中にさえいればどの位置からも見ることが可能。したがって授業を見る私の動きは、指導案に基づきタイミングを見計らって、何度か手元を覗き込むために子どもが座る椅子の後ろにまわり込む程度。あとは45分間一定の位置で、4色ボールペンをフルに使って目と耳での観察と記録に集中することができた。そしてその間の私語は厳禁。ひたすら見て聞く側に徹するのがルール。ところが生活科の授業に出合っ私は戸惑った。これらの条件が全く当てはまらなかったからである。

#### 2) すべてが変化する中で

生活科の授業では教師と子どもの位置が次々と変化する。言葉の記録どころか、教師はあっちで指導、こっちで答えてと、その動きを追うことすら難しい。まして、子どもの場合は全員の間と身体が一斉に動く。その声の意味を聞き分けること自体が不可能。

おまけに教室自体が変化する。椅子と机を片づけて床に座りこみ、廊下も活動の場の下駄箱で靴をはいて中庭の花壇へ走る子もいる。運動場全体に子どもが散らばることもあれば、学校の外が活動の場になる場合も多い。

時間も変化する。休み時間から準備を始めていた子どもが、あいさつもそこそこに活動に取り組む。段々と活発になり、45分が近づいても終わりそうにない。見る側の心配をよそに、子どもたちはますます元気。教師は苦笑しながら次の時間も続けましょうか、といいつつ、子どもたちの間を飛び回っている。おまけに教材はそれぞれ子どもが用意したもの。指導案を見ても書いてあるのは代表的なもののみ。どこで手に入れたのか、何のために使うのか、どのように加工するのか。いずれも子ども自身に聞かなければわからない。

要するに、生活科はこれまで動かないと思っていた授業の条件がすべて変化するわけである。理由は授業の意味が変化したから。まず子どもの活動があって、それに教師がいかに応えるかが問われ、教師の教え方ではなく子どもの活動の仕方が問題になる。教師が教えるのではなく、

子どもが活動を通じて自ずと学ぶことが課題になる。とすれば授業の見方もまた当然変わらざるをえなくなる。授業の条件が変化するなら、変化を見なければならぬ。子どもの活動が問題なら、活動を見なければならぬ。見る対象が変化すれば、見る方法もまた変化するのが当然。ボールペンで文字を書く方法は言葉のやりとりだからこそ意味がある。ではどうするか。

### 3) ポイントは白紙の使い方

そこで、私は生活科の授業を見る方法として、次のような原則を定めた。

**「焦点は発問より場面転換に 記録は文字より絵で」**

生活科の授業の場は子どもの活動に応じて変化する以上、授業を見る目は、“場”の把握が基本になる。さらに活動とは5感のすべてを使って身体全体が動くこと。場は活動とともに変化する。次々と生まれる“活動場面”の記録は、絵で表現するしかない。ただし、絵といっても目的は授業全体の場面展開の把握である。人に見せるためのものではない。

この図は浜松市の小学校で見た「ジェスチャー遊び」の私の授業記録の一部である。ブラジル



ルから働きに来た方の子どもの、片言の日本語しかできない子が1年に転入してきた。その子とのコミュニケーションのために子どもたちが考え出し活動。生活科ならではの発想である。

(a)は授業の最初に先生と子どもが集まってルールを決めているところ。机は廊下。(b)はグループにわかれてジェスチャー開始。アップテンポの曲がCDラジカセから流れる。大きい人が教師。小さい人が転入者。移動は矢印で示す。

このように、私は白紙に活動の場を次々と枠取りをして、活動場面が変わる度に略画で記録する。この授業では、教師の実演、大騒ぎになってグループ崩壊、教師がグループごとにアドバイスなど、10場面の略画を作成した。描く際に重要なのは、絵の正確さではなく場面転換の教師の指示の仕方や子どもの動作の変化の

把握。見取り、聞き取り、読み取ったことを文字や記号でどれだけ瞬時に記入できるかが勝負。さらに活動が進むほど場面が増えたとすれば、何枚略画を描けるかが、活動の質を判断する必要条件と考える。では十分条件は何か。

### 4) 問われるのは見る者の生活

活動とは五感すべてを使っての表現。その意味を読み取るには、やはり五感すべてが必要である。子どもと体験を共有するしかない。また持参した材料に込めた意味は、子ども自身に語ってもらうしかない。ただしその意味の解釈は、学校言語ではなく、彼や彼女の生活に根ざした言葉を手がかりにするしかない。

**「活動は見るより参加するもの。子どもとのつきあいは五感全体で。」**

**聞き取りは方言（生活用語）で。」**

もちろん一回の授業ですべての活動に参加することは不可能である。場面展開の把握に徹すれば参加自体が困難になる。教師の動きや指示のみを追い続ける場合もある。一人の子どもに徹底してつきあう必要もある。問題は焦点の絞り方である。さらに、活動は子どもの日常生活の反映であるはず。活動の背後に教師の日頃の指導をどれだけ読み取れるか。子どもが持参し

た材料や道具に家族とのかかわりをどれだけ聞き取れるか。いずれも授業者や子どもではなく、見る者の生活（科）力の問題。これが活動の質を図る十分条件と考える。

「生活科の授業を見るものさしは、授業者や子どもの方にはなく、  
見るもの自身の生活のあり方」

## 第2節 生活科実践の基本用語<sup>2)</sup>

### 1) 辞書的ではなく 文脈の中の意味を

私は、生活科の意義は、社会科と理科に代わる新教科の誕生ではなく、小学校教育の新たな創造にあると考える。実際に、生活科への取り組みが深まるにつれ、全国各地で従来と全く異なる教師や子どもの姿が見出される。生活科の実践を表現するために、新たな言葉を必要とする段階に近づきつつあるようだ。事象のユニークさは、それを表現する言葉のユニークさとセットだからである。だが現時点では、まだ独自の用語創造には至っておらず、既存の言葉に新たな意味を付与すること、いいかえれば言葉が使われるコンテキスト（文脈）を変えることで新たな事象を表現する段階にあるようだ。

生活科は未だ発展途上。実践もそれを表現する用語も、辞書的な短文で明確に定義できるほど確定していないと考える。そのために生活科実践の基礎用語の解説は、その用語が用いられる文脈を提示することで表現したい。なお、そのため、解説する用語を「生活」「活動構成」「環境構成」の三種に絞り、その記述過程で基礎用語をゴシック文字で提示したい。

### 2) 社会も自然も生活の中に

生活科では、社会や自然を一体的に、またそれへの自分との関わりを重視した学習活動が行われる。この一体的に自分とのかかわりの意味を解く鍵が生活科固有の生活（観）のとらえ方にある。図-1を見ていただきたい。ポイントは次の3点である。

- ①自然と社会を連続した枠で考えること
- ②自分と自然や社会との関係を人と自分との関係を通し得られると表現していること
- ③それらが生活という枠の中で行われていること

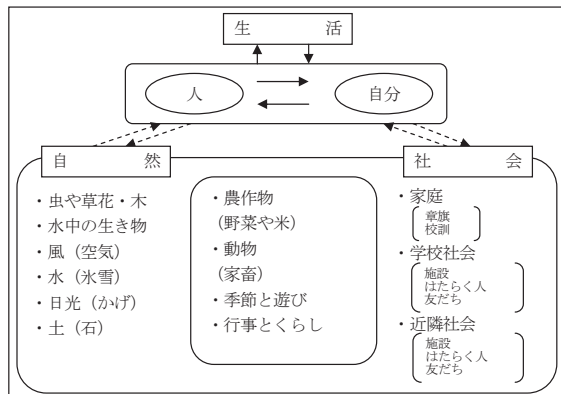


図-1 静岡大学教育学部附浜松小学校研究紀要 1988  
『「生きる・考える・あらわす」力を育てる』より

もともと社会と自然という概念は日本にはなく、明治期に“Science”と共に輸入された“Society”と“Nature”という考え方の訳として、社会は造語、自然は意味を新たに付加された言葉である。その意味で世界を社会と自然に分けることは“Science”を生んだヨーロッパ近代固有の認識方法ともいえる。

だが、現代は脱工業化やポストモダンが論議される時代である。むしろ、環境問題を代表に、自然現象と社会現象の区分が却って問題解決への道を閉ざす場合が多々ある。何より

子どもにとって町の並木は自然を学ぶ数少ない機会だが、それを育てる地域の人達と自分



とのかかわりを学ぶ契機でもある。同様のことは“春さがし”や“秋さがし”に訪れる公園にもいえる。

公園や道端に咲いた草花を愛でる心の大切さは、それを気付かせ確認してくれる人と人の間(あいだ)のコミュニケーションにより生じる。自然が失われたのではなく、自然の価値を気付かせてくれる人と人の関係が失われたと考えたい。道端に咲くタンポポの前に共にかがんで見つめつつ、先生が花への思いを語るからこそ子どもの心に響くのではないか。教科書や図鑑の絵では、花の構造を知ることができて花への思いを感じとることは困難ではないか。

他方、子どもの生活はここからが社会ここからが自然と分かれて存在しているわけではない。まず生活がある。その生活の過程で生じる様々な事態の中で、人に教えられ、自ら学び取ることにより、社会や自然と自分とのかかわりに気付き、人として生きる知恵を身に付けるのである。そしてこのような学びの過程がそのまま新たな生活の創造の過程として展開する。すなわち全てが子供の日々の日常生活にある事象を通して学ばれ、その結果が再び生活の中に還元していく。そしてまた新たな学びが創造される。一人の人間として生きるための基礎・基本、すなわち自立への基礎は、このような生活過程の中で築かれる。それを意図的に準備するのが生活科の学習活動である。

したがって、生活科授業づくりの第一歩は、一定の内容を特定の教材と指導法で教えるという教育観、あるいは教師と子どもが教える側と教えられる側に固定された授業観から教師一人一人が自由になること。そのためには教材構成よりも活動構成が、学習指導よりも教師の援助が重要となる。

### 3) “活動構成”は学校の外の“子どもの生活”を知ることから

構想	①子どもの生活の経験⇒歩いてつくる生活科マップや生活科暦 ②活動の自由な発想⇒一年間の活動の基本構想(コンセプト)づくり ③活動を相互に関連づけた全体構成(ストーリー化)⇒年間活動計画
構成	④活動構成⇒活動の基本設計、全体の流れの想定、人や物の手配、家族と連携 ⇒教師間の協力、合科指導への配慮
実践	⑤活動(指導)案⇒多様な活動場面のイメージトレーニング、記号や絵による活動展開の開示 ⑥活動実践⇒臨機応変の対応、子どもの学びの発見と意味づけ
再構成	⑦活動の修正・再構成⇒授業の見直し、全体構成の総括 ⇒教師の自己評価 ⇒家庭との活動結果についての連携

図-2は生活科の活動構成過程の概要を示したものである。まず、教師が子どもの生活世界を自ら歩いて子どもと同じ目の高さで経験すること。そこで見出した人や物の出来事を図や文字で分かりやすく記録したものが生活科マップや生活科暦や生活科人材バンク。次いでその経験やマップをヒントに

図-2 生活科授業構成モデル

四季おりおりの活動を自由に発想し基本構想をたてる。さらにそれらを相互の関連性(子どものニーズ、ストーリー性、他教科との関連など)や実現可能性(子どもの個性・発達度、他の教職員や学校外の人達の協力度、時間数など)を考慮しつつ年間活動計画として整理する。また、個々の活動の構成(単元計画)では、全体の流れを想定しながら活動に係わる人や必要な物を学校の内外にわたり手配し、家庭との連携をとりつつ活動の基本設計を描く。その際、活動を無理なく展開できる鍵は、第1に教師一人ひとりの持ち味を生かした学年間の協力、第2に他教科との合科的指導であることを強調しておきたい。

個々の授業においては、活動(指導)案を作成し授業実践に望むことになるが、その際にも重要なことは、どれだけ子ども達との活動場面を具体的に想像(イメージトレーニング)できるか。さらにそれを絵や記号により図として表現すること。教師や子どもの問答を文字によ

る表現のみでは、生活科の活動案を描くことはできない。ただし、ひとたび授業が始まれば活動案にとらわれずフレキシブルに子どもの内発的な発想（生活への関心・意欲・態度）や動き（活動や体験についての思考・表現）を援助することが重要。さらに、子ども達の間で生じている学びの過程（身近な環境や自分についての気付き）をいかに見出し、気付かせ、意味づける（評価する）かが教師の役割である。授業の終了後においては、その都度活動を見直すとともに、必要に応じて適宜活動の全体構成を総括し、あくまで子どもの意欲・意識の流れを核として活動の修正や再構成を図ることが重要である。この段階でのポイントの第一は教師自身の自己評価や相互評価の多面的な厳しさである。また、子ども一人ひとりの活動過程での学びの成果や課題についての家庭と連携である。

#### 4) 生活科を支える環境とは

生活科実践独自の基礎用語が環境構成であろう。生活科ではこれまで動かないと思っていた条件が全て変化するため、授業の環境をつくること自体が課題となるからである。すなわち環境の構成とは、教師と子ども達が積極的かつ能動的に活動に取り組むことができるように、さまざまな条件を整えることである。それは次の二つにわけられる。

(1) 生活科教育全体の学習と指導が可能になるための環境の構成

(2) 生活科教育の個々の活動における学習と指導のための環境の構成

まず(1)は、生活科教育を実施するために必要な人や物や出来事や仕組みを児童が生活する場全体にわたり整備することである。そのためには、生活科教育を実施する前提として、①校舎の中、②校舎の外、③学校の外という三つの場におけるひと、もの、ことの調査・整理が必要である。さらに生活科を支える次の二つの仕組みを整備する必要がある。

##### ①学校内の仕組みと活動環境の再構成

- ・教師間の連携、教育課程、学校経営などの再構成
- ・動物の飼育、植物の栽培、運動場や中庭の利用のための再構成

##### ②家庭や地域との連携

- ・地域の人々を子どもたちの先生に、家庭をパートナーに

また(2)は、個々の活動に応じて、子どもが自ずと活動に取り組める環境の整備である。(1)での準備を基礎に、どれだけ子ども一人一人の実態に即した指導と準備ができるかが課題になる。i 子どもが学習活動の一貫として構成する環境、ii 教師が子どもの学習活動を支えるために構成する環境、iii 授業・学習過程における活動の場の同時進行的な環境構成が考えられる。

次の表は、「学習指導要領」、「指導書」、「指導資料」から、生活科の活動が展開される三つの場それぞれの“ひと、もの、こと”に当たる言葉を拾い出し分類した「生活科における環境キーワード」（湖西市立白須賀小・松本孝夫先生との共同作成：当時）である。環境構成のヒントにしていきたい。

図-3 生活科における環境キーワード

	ひと	もの	こと
校舎の中	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆先生など学校生活を支えている人々</li> <li>◆友達</li> <li>◆先生や主事さんなど学校での生活を支えてくれる人々</li> <li>◆先生や友達</li> <li>◆いろいろな先生や人々</li> <li>◆学校の友達(の名前)</li> <li>◆児童がかわわりをもてる人々</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆学校の施設</li> <li>◆学校の施設や設備</li> <li>◆空き箱や割りばし、ひも、紙などの日用品、空き箱、空き瓶、段ボールなどの廃材など、児童が日常的に身の回りでも集めることのできるもの</li> <li>◆児童がかわわりをもてる施設・設備</li> <li>◆製作や発表会等で十分活動できるスペース</li> <li>◆飼育や栽培に関する施設・設備</li> <li>◆児童の興味・関心や技能の程度等に応じた現場集めたものや作ったものを展示し、雰囲気盛り上げたり、振り返りできるスペース</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆入学(式)</li> <li>◆学校や学年の行事</li> <li>◆自分たちで季節にかかわりつつくり出す行事→野菜などの収穫祭、花祭り、夏祭り、雪祭りなど</li> <li>◆児童がかわわりをもてる人々の働き(仕事)</li> <li>◆学校の行事(家庭訪問、運動会、〇〇大会等)</li> <li>◆児童の生活、遊び(自然、行事とのかわり)のある活動</li> </ul>
校舎の外	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆先生など学校生活を支えている人々</li> <li>◆友達</li> <li>◆先生や主事さんなど学校での生活を支えてくれる人々</li> <li>◆先生や友達</li> <li>◆いろいろな先生や人々</li> <li>◆一緒に通学する友達(の名前)</li> <li>◆児童がかわわりをもてる人々</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆学校の施設や設備</li> <li>◆土、砂など</li> <li>◆身の回りである自然の材料</li> <li>◆学校の施設や設備</li> <li>◆土、砂、石、氷など</li> <li>◆身の回りにある自然の材料</li> <li>◆身近にある草花、木の葉、木の果など</li> <li>◆昆虫</li> <li>◆動物物のいる場所</li> <li>◆木の葉、木の実、石などの自然物……など、児童が日常的に身の回りでも集めることのできるもの</li> <li>◆児童がかわわりをもてる施設・設備</li> <li>◆土、砂、樹木等実際に触れられるもの</li> <li>◆飼育や発表会等で十分活動できるスペース</li> <li>◆製作や発表会等で十分活動できるスペース</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆生活物の活動</li> <li>◆育てている生き物の成長</li> <li>◆季節の移り変わりに伴う様々な変化</li> <li>◆周囲にある樹木等の自然の機子の変化</li> <li>◆学校や学年行事</li> <li>◆自分たちが季節にかかわりつつくり出す行事</li> <li>◆児童がかわわりをもてる人々の働き(仕事)</li> <li>◆学校の行事(家庭訪問、運動会、〇〇大会等)</li> <li>◆児童の生活、遊び(自然、行事とのかわり)のある活動</li> </ul>
学校の外	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆家族</li> <li>◆近所の人や店の人など多くの人々</li> <li>◆公共施設で働く人々</li> <li>◆(自分の成長を支える)多くの人々</li> <li>◆一緒に通学する友達</li> <li>◆(交通)安全を守る人々</li> <li>◆近隣の人、及運の家族、子ども会の人、よく利用する商店の人、駅などの近くの公共機関で働く人々</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆遊び場としての公園、空き地、野原、買物に行く店、通学路、郵便局、駅など</li> <li>◆遊具</li> <li>◆遊具以外のいろいろな施設や設備</li> <li>◆危険な箇所</li> <li>◆公民館や児童館など</li> <li>◆砂場や安全な河川など</li> <li>◆公民館や児童館など</li> <li>◆安全を守る人々</li> <li>◆よく利用する商店</li> <li>◆公共交通機関</li> <li>◆安全のための(公共交通機関の)施設や設備</li> <li>◆電車や車、バスや停留所など</li> <li>◆船や港</li> <li>◆身近にある草花、木の葉、木の果など</li> <li>◆土、砂、石、氷など</li> <li>◆川とか海、雷や氷など</li> <li>◆動物植物</li> <li>◆動物のいる場所</li> <li>◆野原の花</li> <li>◆昆虫</li> <li>◆植物が成育している場所</li> <li>◆空き箱や割りばし、紙や輪ゴムなど</li> <li>◆木の葉、木の実、石などの自然物、輪ゴム、割りばし、ひも、紙などの日用品、空き箱、空き瓶、段ボールなど</li> <li>◆廃材などの廃材など児童が日常的に身の回りでも集めることのできるもの</li> <li>◆衣服や食べ物など</li> <li>◆誕生時の写真、幼少の頃の衣類やおもちゃなど</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆家庭の仕事</li> <li>◆買い物</li> <li>◆(お)使い</li> <li>◆手帳</li> <li>◆電話</li> <li>◆季節の変化</li> <li>◆四季の変化</li> <li>◆季節や天候など(の変化)</li> <li>◆地域での生活</li> <li>◆四季や地域の行事</li> <li>◆動物植物の変化や成長</li> <li>◆地域の生活</li> <li>◆季節や地域の行事</li> <li>◆動物植物の変化や成長</li> <li>◆家庭で自分が行っている仕事</li> <li>◆家族の世話をすること</li> <li>◆家計を支えるための仕事</li> <li>◆安全で生活や楽しむための買い物</li> <li>◆自分で生活や楽しむための買い物</li> <li>◆自然の変化</li> <li>◆生き物の活動</li> <li>◆生活物の活動</li> <li>◆自然の変化</li> <li>◆季節の移り変わりに伴う様々な変化</li> <li>◆周囲にある樹木等の自然の機子の変化</li> <li>◆周囲にある樹木等の自然の機子の変化</li> <li>◆家庭での生活</li> <li>◆衣食住の機子の変化</li> <li>◆季節的な遊び</li> <li>◆たこあげ、かまくらなどの地域の伝統的遊び</li> <li>◆季節にちなんだ行事や祭り</li> <li>◆夏祭り</li> <li>◆秋祭り</li> <li>◆地域の歴史や人物とかわり</li> <li>◆地域のイベントの行事</li> <li>◆人々がみんなの幸せや地域の発展を願い、地域の結び付きを強くたり楽しむを増やしたりする催し</li> <li>◆児童がかわりをもてる人々の働き(仕事)</li> <li>◆地域、家庭の行事(七五三などの祭り、地域の特色ある行事等)</li> <li>◆児童の生活、遊び(自然、行事とのかわり)のある活動</li> <li>◆児童の日常や物の考え方、ことわり方、友達とのかわり、生活習慣や生活技能など</li> </ul>

【注】 ⑧実践枠内の上段は①「小学校学習指導要領 第2章各教科 第三節生活」より、中段は②「小学校指導内 生活編」より、下段は③「小学校 生活 指導資料 指導計画の作成と学習指導」より抜き出したキーワード及びキーワードとキーワードによる文章である。④これらのキーワード及びキーワードは、極力原文のまま掲載するようにした。⑤上記①②③の資料間で、抜粋した中に同一の文言あるいは同意の文章がある場合は、①・②・③の順に優先して載せる。